[illegible]神論

ロ 13
34
1

芙蓉[illegible]先生校文

[illegible]石[illegible]鬼神[illegible]

浪華書肆[illegible]星[illegible]

白石先生鬼神論序

夫鬼神之跡恍兮惚兮言之難也尚矣易傳曰陰陽不測之謂神又曰知變化之道者其知神之所爲乎唯神也故不疾而速不行而至中庸曰鬼神之爲德其盛矣乎視之而弗見聽之而弗聞體物而不可遺使天下之人齋明盛服以承祭祀洋々乎如在

其上如在其左右嗚嗟先聖之教至矣乎我邦寶正之際白石源公學該洽博識透淵深著作之富動及瑣碎其所釋鬼神論一篇能近取譬而言所難言者也其辭則諺云說則典始則根據經義中則旁引訝異終而歸納雅正實足發蒙矯機矣唯是一時應需小而辯物作者自不為意私

淑之徒轉傳謄寫國字紕繆訛誤相錯殆至不可讀頃日鬻書家某爲鐫此篇校者某〻刻已成吾所知於商者來勸求敘焉余謂校者所照〻皆轉傳之物無定本之取正則恐有未悉考究者乎而余不與爲要之兎園小冊自瑕纇固不足損源公之瑜此刻足以拯私淑之徒謄寫乃爲敘以

弁其首云

寛政庚申秋九月望　天山眞逸撰

鬼神論上

筑後守従五位下源君美著

鬼神のことまことにいひ難し。たゞいふことのかたきのみにあらず、又聞こともまたかたし。たゞきくことのかたきのみならず、又信する事またかたし。信ずることの難き事ハこれ知るかたきの義ならではかなふまじければ、よく信して後よくしるとよくしりて後によく信ずとすれども人をあざむくにいたるなれ。よくいふことを得べきいふ事まことにかたからず。こゝにいふ鬼をむかしハ子夏の疑ひするを知らぬちゝとありやうしやかしいふとも絲問よりてぞしに

吾死せるものゝしれる事ありと云はんとすれば孝子
順孫の生けるを妨げて死せるを送らん事を恐る
また死せるものゝしる事なしといはゞむしろ不孝の
子のその親を葬らざらんことを恐るゝなり
さればしる事あるやなしやをしらんとならば今の急ならねば
後まてつゐにおのづから知なんとぞ夫子はのたまへ
給ひけるこれ聞てよく仁なるがゆへに大なるべし
又子路鬼神につかへまつらん事を問ひしかばいまだよく人につかふる
事あたはずいづくんぞよく鬼につかへまつらん
いまだ生をしらずいづくんぞ死をしらんとぞ宣

まひき又これ知る事かたきにやあらんときこゆるを
なれとよく人につかふることを得ん後鬼につかふ
ぬべき事なれどよく生る所を知て知なん後ハ
死せるをもしるらん事かくれなきやうの理をとりて夫子ハ
おしへさせ給ひけるなるべし樊遅には民の義を
はげみ鬼神を敬して遠ざくるこれを知といふべしと
のたまひし彼此をかよはして事理を知べし
らく人につかふるを民の義を務るなり鬼神
を敬して遠ざくは人の鬼によくつかふる道なりや
この二つの説なれば詳にこそよく知ることにいかゞ

あり故に禮ハ生を養ひ死を送て鬼神に事
ふる處なりといへり禮記に記せる(礼記)又明にしては
禮樂あり幽にしては鬼神ありと傳へ(礼記)ると
明と幽とわかつなるに似たることあれども
はじめよりまことにひとつにしてよく通ぜで
かなはぬ事なれば深くしらずしてあきらかなれば鬼神のこと深
きかは聖賢説きえたまふをよく分明なるにたゞ
禮をよくしらばよく熟し讀みなばさとりぬべからん
紫陽の朱子のいひおかれしところ今試み
三禮をよみはじめぬる(周礼 儀礼 礼記をいふ)にいはしきへ此書の送

せる言せし乃儒生の格しお言なとありて世見へく
いろいろしてその君をぞらにそ辯せんとするもあれ
れはさらにやそれら深甘きをとそれ関係んことを知らる
かなはぬへしまちゐむことはいふべくはなんぶべきたゞそ
名ことはりてその義をやはらぐべき
まづ天をしては神といひ地をしては祇といひ人
をしては鬼といふなり周禮にはしえさえぞかく
その名異なれど誠を陰陽のその氣靈なれば
通してはこれを鬼神といふなる陰陽二つの氣
といふこと本より一つのことにてその左あめとと

伸るとみて（一元の気の屈伸 往来をいふなるべし）その氣縮りて伸るを陽と

いひ（春と夏とを いふなるべし）かへりて屈めるを陰といふ（秋と冬とを いふなるべし）陽の

うちにも屈伸あり（陽の中なるは伸るなれば陽中の陽とし 陽の帰るを屈るとしこれを陽中の陰とし）陰のうち

にも屈伸あり（陰の中なる屈むるを陰中の陰とし 陰の帰るを伸るとしこれを陰中の陽とし）かく屈伸往来の形の

つらなる跡二氣の良能といひつべきなり（張横渠 の説なり）ただし

陰陽を鬼神といふはこれを陰を屈すると伸るとのおのづから

然なるを鬼神とはいふなりされば鬼を陰の霊神

を陽の霊とはいひたれ（禮の 注疏）もろ深き文の字義しるく

いふ時は天神地祇人鬼といふときは天の字は常に伸ふ

（天のめぐりて やまざる事をいふ）又氣の清明なるものを神といへば日月星

辰の類これなるべしまた変化のはかりしられぬかくされたる

（易に神は方なしといふなり）天にありては神と名づく地のものにては山を

むすびし川ながし草木生じあるなどをいふなるべし

風雨雷あれば地にありては祇となづく祇の字は

みしへを示す作るなり（周礼には 地示とあり）とあんべしよりなる示見は著見

の義あるべし（朱子の説 かくのごとし）人にありては鬼といふ鬼の字は鬼の

ことなる帰るなり（鬼と帰と 音近し）人死しては魂は天にかへり

天にかへし体の魄はのこりて地に帰る魂魄天地にわかれ

かへるをもて鬼といへるなりまたこの先王制しまつりし

礼にては天下をおさめしめされてはかならず祭る天神

地祇人鬼の世にみちて年あり日月星辰寒暑水旱山林川谷丘陵のよく雲をおこし風雨をなせるに至るまでことごとく祀典に入る（祀典とは祭祀の式天神地祇をまつるのふみなり）又群生のためには大社を建られ御為には王社をたて社稷乃神をまつる也（社は土地の神を稷は穀乃神をまつるをいふなり）侍に司命中霤國門國行泰厲戸竈の七祀をまつらる也（司命の神は人の命をつかさどる也）（中霤は室の神行は道の神泰厲は鬼の主戸は戸の神竈はかまどの神也）又祖考乃神あるを七廟を制して春は禘の祭あり秋は嘗の祭あり（これは春秋の祭乃名なり）諸侯は天地を祭ることを得ず唯封内の山川を祭る（封内は境内也）又群生のために国社を建られみづからのために

侯社を立られ又五廟を祀らる（五祀は七祀の内二をはぶきしものなり）大夫は三廟三祀庶士は二廟二祀庶人は廟をもふくる事を得ず只その先を寝にまつりて一祀をまつる事を得る也（かまどの神をまつるなり）かくして先王乃祀典をなされし其分々別る所ありてみだりに制し給ひしところぞかし（天子は天地乃主諸侯は一国の主大夫は一家の主なれば分限によりて其まつるところ大小の異あるなり）天子は天地の中にすみて天地乃なすところをおさめて天地の氣をあつめ給ふ一人也誠の心まつらずば感ずる其誠敬を極めたまはゞまつりたまふ天地乃氣を感ぜしめてあつまり集まりて百神おのづから其職をうけたまはるべし諸侯も

国のあるじとしてその封内の名山大川その神をまつり
かかる處なれば其神おのづから感應しまつるべき
理なり大夫ハ家のあるじなれば五祀の神をまつるが其
神を感しまつるハ常の事（家語に卿大夫ハ三祀とかけれど王制に大夫ハ五祀と祀ると有 祭法にハ大夫三祀にして祀せる三祀とハ戸竈中霤門行の神をいふなり）
いふ禮に三年乃喪ハ（父母の喪之）天子より庶人に達するとみえ
たれば庶人といへども其尊卑の位こそ異なれ其親を
孝なる心ハかはる事なければ親の為にハしかあれど
其先祖を祭るハいまわかちて士ハ世をかさねつとなりたれバ
それ教を降して庶士庶人ハ其親を祭る
なれバ其身ハ人死して鬼魂となりて

天と地とはじめてわかれしその後子孫をかさねる年
月をへて今にいたりても又其わけを知る其理なれば
人の心ハ古の聖王この禮を制しまつる屋もまた
いかなるを人鬼といひまた神ともかしこの鬼神といふ事を
祀るよりてみる時ハ此名のもと新人より知れる事
（家語にみえたり）むかし宰我乃鬼神の名をきかんとゝひける
夫子これに答へたまひしハ礼乃祭儀家語等乃文にみえ
鄭乃子産のことばハ春秋傳にみえたるまゝなれ
遺る言ニ於て鬼神の義をも求めまほしけれ子産の
ことばに人ちかくしてはじめて化するを魄といひ既に魄を生じ

しく陽なる氣ハ魂として傳はりものゝ體物するはじめん
わが身ハ父母の氣をうけ得て則むすんで胎を
なさバこれ魄すでになりぬれバ（これ易に男女精を交へて万物化生すといひしはなれんしされバ）
（朱子云陽ミてはじめて天一水を生ずるといへり又関尹子ニ一を父とするものハすでに身にして氣を父とし氣ハ魄として傳ふ）其の魄精
なりぬれて動くことなからざらんハこれ陽としてたれやも
これを魂といふ（按ずるにこれ地二火を生ずるなるべし火ハ陽にて陽ハうごく子に二を母とすかるなる血を母とすらく血ハ火なるかと云さ）
（是ハ子産の云ひし事ハこれ父母の精血をうけて胎をなす胎よりすでに以るなるべし）先儒その説をとらへて集め
ず（北渓陳氏の説なり）魂ぐなりて形すでに生じて神すれバ智
をあらハさるゝはいひなり（按ずるにあらずいへ鬼といひ魄といふハこれ陰なる神といへ鬼とりいひて又これ陽なるなれバ）
（精ハ魂なるの神を火之魄ハ金なり魂ハ木之陰陽ハ氣升降して升るものハ火之降るものハ水なるかはなれんとして升るとして降ることを得ざれ）

ものハ金くらの四方の皆土にはしてなるものなりと易に天の數五地の數五なり天一水を生じ地二火を生じ天三木を生じ地四金を生じ天五土を生
ず土までに生じて後地六水をなして天七火を成し地八木を成して天九金を成し地十土をなすと人十月にして生れ出るなりと人ての數皆備
はりて形ハ氣とともに胸く腹にまれおのしれや臓腑ともに生れ出て八すれハもち飲食をとり麋爛をし氣を以て形すて日に生じて神をなす智を發するなり
（魂ハ陽なり）これ人の知覚ハ魄に屬し耳目ハ魄に屬し
陽氣を魂とし屬するがゆゑに陽を魂とし陰を魄とす
ハ精る魂ハ陽の神にて魄ハ陰の神なり（淮南子の説に曰天氣為魂地氣為魄）
（其魄ハ陰の霊神ハ陽の霊とも云へり字のごとくてがやしき事をいへる）され氣を魂とし精を魄とし氣とハ呼吸
出入するものこれ（いはゆる息なりとし）耳目の聰明をば魄となす（耳ハきこへ目ハみる）
とし傳ふるなり（已上祭儀の説也）夫子宰我に答へさせ給ひしハ氣
といふものは神の盛なるものなり魄といふものハ鬼の盛なるん

なるゆへ鬼と神とを合するハ教の至りなりと凡生ある
ものハかならず死す死すれハかならず土に帰るかれこれを
鬼といふ骨肉ハ下に斃れて陰に野土と為
りその氣ハ上に發揚して昭明薫蒿悽愴となれ
るハ百物の精なり神の著なりといふこれ先
人達うやまひ附よりて宮ひらきんしちからを重し生
けるとよまるの呼吸出入する事といへるハ鬼死
して神となるにもこれなく魂魄のむすびたるれ指し（聲をはいまき死せるとき）
（これ靈なり）いはる時人の耳聰目明なる魄といふものを
すなはち死して鬼といふハみな盛なるときのこれ

既に死して後その鬼と神とを合せて
まつる事を是聖人のおしへのいたりなりとしれ
いふなりしかれとも皆死すれハ必ず土にかへる
これを名つけて鬼といふ（これ精魄也かへるところの鬼はかくれたるの謂なるべし）
其骨肉のことくきハ下に斃れて野乃土と朽ちて
（これ土を朽つる物骨肉のことき陰の実なり）その氣ハ（鬼氣）上におしあかり
揚て（魂魄天に升るなり）ひとハいふてもかく尾をかへる事あり
（これ昭明人の死する時…）あるひハ蒸し升れ露の氣
なり（これ薫蒿）或ハ人として物をいふ
ものしらしむる事あり（これ悽愴）すなはち百物の精

なりと（百物とハ人と物とをあはせて云ひしなり精気は精魄の謂にてこれすなはち鬼なり）神乃あらハるゝところ
となりと（神とハ神鬼乃いとなみにして外になき神といふにはあらずとぞ）寔しくおもひていはゆる人乃聖人
その名義割してかのむらゝに鬼神とハ名はなるひ
しとけいふことよりうつるめれて子の産のはじめし所なり
はまさく求めなばいはゆる精気物となる易にこの生れ
始めなと云ふ夫子の宣ひしやうに語ては云おてかなえ
なかれいさを称る遊魂変をなせるこの死去ん然なるを
云ふ称ゆえしはれぞ鬼神乃情状しきし得べきなれ
なや（鬼神の情状を知るとハ人鬼にいふ情状をさしたる事とはいへとも他をきりたはあるべしや）かく称これんなり
通して説者のある人の生まるゝ死するとハ陰陽の

の気乃あつまると散とれ二つにして集まれる人となりて
きたりて後ハ鬼神となれるその魂の地に帰るを
鬼と名けそのたましゐを天にのぼりゆくに伸るを
謂ひなれバかくなるものなれバ神と名付るなれあつまれバ
気乃と天地の気となるなれバ散じてハ天地にかへれ
帰るものなれバたぶて（鬼とハ鬼神を合せいひしとぞ）これを人鬼とも
なづくると其義前にいふところにもことなるべきと
ぬるみなりの河海乃水とその器に盛りたる物をそ弁
得るのはちかれ河海の水その器乃内のにそそくべきなれ
水その水もにに一水なる器乃中にあらざるなるにはなれたれば

亦本乃河海の水を汲て此水ハ彼水とハ又一ツなる利
其の子孫乃其川上を奉するをおもひて其の祖考に
鬼神来り格るとハ陽燧をもつて火をとり陰鑑を以て
水を取るが如し子孫の精神ハ祖考の精神まて
彼此もと一氣なれバ一氣の相感ある事をもて感
通ずるとなれバ天地の間に生れ出る
者なれバもの天地の氣の生し出すところにあらざる
なし人もまた人ハ其ニ一氣の生する處なれバ其ならず
其人物の陽なる物の人にかぎらず其一氣
乃生する処なれバ一氣ならず相感する事を能ざるな

いはゞその人物をも感しがたきことなれバなり其祖
考の氣ハあらたに其の子孫乃祭りをうけまじきとて独り
離されたる氣にあらず是をたとふるに一貼乃藥を服する如し
藥の性のごときハあるひハ寒なり或ハ冷なるもあり
温なり或ハ熱なるもあり或ハ補ふべく或ハ瀉して風を散ずる
ありて有ざる所なくその中にてそれぞれに等しからず君となし
臣となし佐使となして（医乃薬を合する君臣佐使の方といふことなり）合せてこれを
一剤として與ふるに唯一種の湯となる是何ぞ
寒温いづれか温熱なることを辨まふべからざるしかれバ是
彼するに知らずして心にゆくべきハ心にゆき肝に行べきを

行にゆく陰とゆくへきハ陽にゆきて膊肺に行へきハ将将
手なまておのおのその類を以て相感すれハこそなれやまる
さるところハ又人死してその鬼魄みちたれは
常に天地の間にみちくて其氣と共に運行し止まる
ことしはありて盡ることなくはたる事や天地ぶあらんの字
乃如きを消長ありて人すてに生まれとして死て歸
ることなく發せる氣いつでる時くあることなるべし彼古番
よ上下つくと履とまつるとゆるまて尊きいやしきなと
その先に及ぶる世数わかくひし降ることいつへの聖
人さらかれ君臣乃分を明らかにして上下の禮をたてるよ

まひしみなのハあるんかられかありて妙なき理をこそあ
らめんされハ子産の云ひきん物の精を用ひ給ふことお
ろかならされハ魂魄強くして衣をえて精爽あるなく
神明にいたるとはかの理なれやかくのよふ云
なからの魂を多く強く氣すこし形もはく取強くされ
て多はなく形弱なれハ多からも又よろしからす魂を
多けれともくはしく魄を形をとらって強くるへし人貴なれ
ハその勢大にしてみれ魄はかりし富めれハその養厚
にしてそ魂ほし 子産の云ひし物の多くは衣食を給ひなからその豢養れもの故にあたりかたき魂魄すてに
つよかれハおのづから精爽ありて 精とハ神のいまたなかれさること爽とハ明のいまたあきらかなること 其

鬼神明らかなれば、たかきは天子として富
四海乃内をたもちて世々に其事ハその物の精を用ひ
てせまふ事尤おほしといひつたへし聖子神孫七世
の後までもうけつがせ給ふほどハかの天下の神上帝
乃御傍また左右にありて移りまひ給ふべし（これは天子乃神天に配し天帝とならびまふへしと）
諸侯よりかみつかたの人あはれなりそれの不滅をもつてつかへて
其富ある事全しからざれば物の精を用る事おほみつる程
まかき家なりからくその魂魄をあつくたもちきよき
あかきを以て神明ならびに其神とれ亦遠き迎まれ霊なる
事ハあやまるへしいのちおきて甘先をみかるの礼七

廟よりかみつかたの至その数ことにかはれども大かた
おそしれハまさる宗廟の礼すら大祖の廟ハ百世まで
うつさず其領を観すでに降ぬれども猶ごとくみぎれ
うつして祧となす（たとへハ五世をかぎる数つくしたるより上の世の祖れ主をば昭穆の方にうつして祧に遷す祧ハ遠祖の廟をいふ）
享嘗乃祭なからんし人死して其気魂まだ
ちかき帰しておれバいはゆる大祖のごとき百世までは其神
までも散らさん又その遠しきハ七世迄くしてハ二世
ちかき事までもかならずむ後に継がれ
春秋乃祭をまつり精を傳りぬ事もいかにやこ
能なる人乃禘乃説を夫子ことに問ふでせられ

禘といふは王者の大祭にて王者すでに太祖の廟をたてゝ又始祖のよりて出
まひし所の帝を太祖の廟にまつりて太祖を配しまつることゝ先王の
民にむくひ遠きを追せまつる足遠くして
あはせまつりまつる所とぞなる其の説を其ゝに収む
凡て天下を治むる者これを知るときは何とも知りとゝのへんとのたまひて
其尊きを指したまひしと論語に伝はれるのまとめかたき
尤もかくなきなりて後まとめたまへるを試みられたるを論
せんとまして彼太祖の廟百世といふとも移すべからざるんて
とは凡天下国家の君となりて百世の太祖として業を
創め統を垂れまつる御事はおのづから彼の尊きを得
まふことも天子にて高大厚地のしくしき名山大川の守
ると広め給ひ始ましては天地山川百神の主となりたまひ

避ることは上帝にだに在りとしも云ひて其孫なるも白星
と共に此遠きにおはしまさばいかにぞ一天の下一国の主たち
なりとも其の徳をもちひ民威天懼るゝにいつま
すゑ親しみの祖先も祀らざるの神なき事非なれど
測るべしいはんやその孫々の御身なるを百
世といふともなどその祀をばたて世代々受くべき次の観
などしくらば其れなりし主なる家をも
いと神なる祖考乃精神はもとの物なりことから清精
神なり（謝上蔡乃説）我があるもこれまでにあふなればなすれ
ば其の祖考乃来格なる（朱子の説）などと言はばこれ比経

みやかなへきし又ならずしるの事ハ小きなれども大きな
理をもたずたとへ物語乃伝ふるある人のかたくに
みえし烏骨鶏といふはをかひし者のせは此
雛の毛ちゞれきあかからぬなやまでつらたゆる有て中に
肉と骨との烏きを常とするにもしろみ白きもあり
なくて色の変れはいふ肉は骨とも異ならぬ事を見し
伝へ侍るをしかしんはなるゆゑし形さまの鶏とかはらず生れ末
ありし後に雌雄をとも得てしも飼ひて程なく子を産
其れ雛毛は形ともに其父と母とに違はず生まれつくるぞ
ならずるみ雛乃大きくなりてもまた子をむらむ毛と

形とも似られども古の多くは黒ければかしほどにあやしきと
みゆる肉も母の骨の白くみえ変じたるもの有あるは
其毛ハ似られども其の形を常乃鶏にかはりたる子
をうめるに於ひては毛ハ色をも形さへ滅ひて絶くはるの
雛も生れて後世江南乃橘を江北にうつせば枳となる
なる事も地によりて変じ出来るもある其国の地の気による
らしに異なれるものあらの鶏をもかくて生得変じてうる
とかいふひぬかくて彼のはらの雛となれるからこそみえ
其子は後の子孫を産むにもそのたぐひの中よりも出でしを
みな其の毛は形とも似ざるのこと又はなかなか古の先乃黒ん

きこえて神あらんことはよくまもりとゞめんとしに露ばかりも不
なかりし後大にあやしと思ひたるの後漢の試むるに
大やうは定まりかたかりけるとなむ魏の末漢の
長沙王の呉芮墓をあばきし盗乃王の六世の孫呉綱に
容の主に似たるを見てあやしみ問ひし事（漢より魏乃末まで四百餘年ありけるに）
唐乃時梁の鄱陽王乃（武帝第十の子 蕭恢の事なり）墓をあばきし盗
は蕭穎士をみて王の形容に似たることを語る（王の時より
百余年なりけるに）人乃子孫三五世の後かはりしも人の面影先祖に
似たるもの多ることはいづれの時も八分の鶏の事ならず
うちに至るまで其烏骨なる子をとらへてそのまゝに

子なども事二三傳の後なりしかば烏骨なるを相せざる事
もてふ遠くしてかうしてまたは祖の靈となりて
烏骨乃性すでに尽ぬとみえぬるは人の祖考乃精神
既に清くぬるに似かよれども烏骨なるは
支流鶏よりも生じたるはまさに子孫の精神にその川
から祖考乃精神あれは子孫乃誠敬をつくして家
よりかゝる處の精神あつまりて祖考の精神集り格る
理なる事に似たるかも聊かし漢の武帝の御時未央殿の鐘
ゆゑなくしてみづから鳴ること三日なりけるにそのやむことを
なしみかど此事を問はせたまひしに東方朔奏して曰

へくされハ銅を山乃子とらしく山ハ銅の母とらみ給る
陰陽乃字類をもつていはゞ子ハ子と母とは相感
する處し山崩らくハ崩るゝ一所ありなん蜀ニ鳴る鶴
陰ニ於て子ちてに和をといふは精の勤なるべし
五日のうちかあらぬにその應なかぬへしとゆへられ
わかるゝの内を南郡の山にて崩れる事三十餘里とつ
奏しまゐらする（其のちは漢の世なりしとき度なかいつれハ蜀の銅山がくづるゝ時は今も人家を貪りし事を八十ととかくそ傳ふる）
らまつる乃理よく通しおもふ世ハ一字乃感する不ち
百世經る迄ゑそける事はむかしより來れハ人これを
神を非禮をうけず民を祀らずといへるを
我族類ニあらざる名等ハ神ともんへを徒をいひと
以すとし其食を享る事なしとなれバ以て陰鑑を以て
以てとらんとし陽燧をもつてその功あらんとする事
水火ちゞにはならんとするにこの族類にあらざるを
その氣別よしも相感すへき乃理あつてうら備ハら
ざれども又後るきを蒼にあつまるかた大なるものかは
る事し此理ありて傳る夫子乃春秋にあやうへからぬ
莒人滅ス鄭ヲと書るは是を莒人鄭の國をとうち
亡せしにはあらず沢莒の公子ハ君の子と公子にて鄭乃君の外孫
なりしを養ひて後としらるなめ（穀梁子ハ実姓をかへて祭をつがむこれハ滅亡乃道なりと）

これ公羊にハ莒の女鄫の夫人と成る鄫乃君夫人の甥をたてゝ子とせしと伝ふ范甯か説
これ鄫の君外甥を立しあとつぎとせしかバ外孫なるゆへ晋書に其ごとくいへるの四説
立しとなりて異姓とせり
後とせし事ハ一定なり 先儒この事を論して 北溪陳氏 異姓を養ひて
後とするハ陽に継く事ある如くなれと陰にハ絶てけ
絶ぬとなんいひし又按するに鄫ハ姒姓の国にて
夏乃禹王の御後なりと封をうけし事既に千餘年
にや及ひぬらむ国小なりといへとも公子公孫の後
君の後と成るへきものいかでかは無らさらん然るに
其絶する所に私し宰ニ畜狎昵の親をえらひたち
し事不孝の情にかなへるへからす況いはんや夫子の志
をし絶ふところへ書せられしに莒人よ滅すの 莒人鄫を滅すと書したるとし

これ莒の君乃子ならしを異姓乃国にして滅すとして
人の後とをせし事その礼にもとるのみか理にそむく
あるへからす古の聖人乃罪ハ其身に止り流て其い
すつまじきものなりしかば絶えし事なき人の後よりつぎまち
なんするを知らくおこり絶しぬるなるへし鄫乃
伯有か厲となりし也子孫のほろびしによりてなく
かの子良止を立て大夫とし 大夫ハ家廟を立れをもて其の祭を
ほろさとしこゑんしかよって事まて既にやみ婦
子大叔その情を問ひしに鬼帰する所あれハ厲ならす
厲をなさす又これらかれの悩するをもとをいひしと又

如何理なりや　なる人来（人の度するところその死にいたるまでならしむるはおよそ理あり）又人死して

厲となる事をいはんに子産の晋にゆきし時

趙景子に問はれしことはなほ人まよへるかの伯有など

の死して身すでに鄭の民の後として（換公の子の國の後）

卿となりて政にあづかる事既に三世その勢ひさかん

なるに節をもてその魂魄ともに強くして大ひなれば

魂魄のなすところ亦あらしかくてその死をとげし

（魯の襄公三十年にころされぬ）その鬼となりて厲をなしけるを子産のその

立後する事を解しつれたるも祭祀のことを治めるに

ひしみこれをみちびきて海に陥せしめんといひしを

その實やむ事を得ずして子産は鬼神の情状を

よく知れると先儒はおほく誉て侍る凡人のいのち長

からずして天年に終る又年行さかんなれども多くは

病によりてはかなく死せるものを紀をもて考ふすれ

ども其数多からずいはゆる勇壮の人戦陣にのぞみて戦

死し或ひは暴悪の人刑戮にあふて誅殺せられ或ひは

自ら剣にあたりひはみづから縊れ或ひは冤恨を抱きて枉げて

殺され（冤あるにして殺されたる類し）あるは暴虐によりて冤死せる或は

婦女の妬ふかく恨み妬むことつめるひは僧道の粉

めて精神を凝しぬる人は（僧尼道士などをいふ久しく精神をやしなふ人はその事術あるものにて）

世の富貴権勢の人にして強死せること伯有のごとき（強死とは病なくして死するをいふ）皆ことごとく死して後その気散ずることあたはずして沈魂滞魄なほ天地の間にあつてなるには妖をなし怪をなしあるは人に祟をなし変をもなす所かるがゆゑに先王の礼に天子は群姓のために泰厲を祀りたまひ（これ七祀のうちなり）諸侯は公厲（五祀のひとつなり）大夫は族厲（三祀のひとつなり）を立て厲人を害親の後なきものをまつる事これあり乃鬼の帰する処なからしむる故なり（昔本邦にも八所御霊三所御霊をたてさせ給ひ尊氏将軍の後に徳宗権現をまつり出させて北條家の亡魂のなぐさめし事これらの類なりや）されば水さえて凝り清なれど氷をむすぶ時は形あり渙

釈るかて帰すれば形をむすぶことなし人の死なるもまた氷解て水に帰するがごとくその気散じては明にかへる（これ儒氏の説なり）なほ覚たる人の夢なきに似たり夢は霊にて生れ又霊なるにたして死せる人も夢なきが如し人死して後に厲をなす事はさながらたかなるもいまだ人魂あるものも人に妖をなすこと死せる人の厲は夢の如きかいつはりぞや（これよりは夢のことなり）はなるま霊なるかくれし死せずして夢なりしばしは形は夢なる也しても神は霊なる所為なるにしこれはかの生涯の妖をなすものありとも死せる厲となすことし死せるの厲はなしこれ此神かくれどもそれを見るに心得べき

妖をなすにまして神かくしといはるゝことあり死せし
ものハ神気く形をも去ずして生るゝものハ神の行方しれずその
形をも入することあるなり是をよむる所形ハ元の小屋舎
なるも神にてもまた主人なるも神ならぬかくしと云なる
也とよび家にありて百里の外に行営して神明に
出入するものゝ朝よ家を出て夕に家に帰るなり是を
云ることの遠きをよぶ異なることにして其家をおく
いふなり業なることにかくれことに聞しありとし
隠れをする妖狐にする猶をせるに居られたる
なしといふなし今も世に匹夫匹婦の言あらんく

乾執のふるき姫妃乃娘なるにハ人をと慕ひ人を損て
神佛といのりのるひとするなりまたまた人をいむる人
れ様のとうはしとのおほくありてあらしれとく親乃
如くなることを本にとまる本性の枉あられおもひ言を
しろめ人を昔性うちに惑くその神外に馳することに
名をれ古とはふる巫覡のとれ待る巫覡の事とは降巫
のた道をもつく人神おどろかせるも（降巫ハ女房子の降くたにおぶ神衛とこれ今の陰術山師さぬ）
（男女子なる人を呪咀するもの）むかし漢の武帝巫蠱の禍をも起りし御蔵子
末みてはかるる人は多千枚ともてくふらかちかみすめて
玉體をおかさせまむとせるとあんのひ恐るきかくら

ハせるゆゑなかりしに江充といふもの巫蠱乃
事にちなませたまひて江充太子と不和なりけれハ木偶
人をと太子の宮中にうつる事多きよしと偽り奏しければ
太子も皇后もこの事によりて失給ひしよし司馬遷か
史記に見えたり是らハ呪咀の蔽りしもの奇鬼をまねく探て
しれ又これら男女をほむるものハ淫鬼を移して構ちとも
いへり（賀伊子乃説）あるひハ男女猥りにもとして或ハ神侍ていへる
のらゆの乃類ハ天地の間にありける沈寃滞魄私のく
ゑ類ニ感しくるの人にかゝりて妖をなし怪をなし
ちはちへるめ是人ハ怠もとくさんハろの事験に

しくしこそ見えれ（験とんなるうちくとき）妖ハ人によりておこるとん
なりけれハ妖ハおのつからおこるといへる（左傳に所）我人によむ
所なくして或ハ言あらかひ或ハ怖るゝ中よりの妖を起し
招くるものとこそされハち乃事多くハあるに人身病
年老くその衰へる時を見る其きるの隙に妄を起
るもおるか唐の貞観乃ころ西域婆羅門の僧来りて
人を呪咀して忽ち地にたふれし忽まいらす事お娶
しに太史令傅奕を呪咀させるに及ひ傅奕を覚
ゆることなくして彼僧たちまちに病みふれ死と覚
邪を正とかへして試得そすまし一心しかりんゆたかの邪

いとゞん行かる真きけれハ又いつ形をハかの苔なとにありんとせは
ろしにかへて風の撃くへかりきるらむん影乃とゝまるべ
からきもらしらくたするられらんわがらんの乃惑ひをとと
いふ色きたふるハ死し或を人に憑て物いひかする
なしこるら狩なりやしん精をれ人乃知らぬ神の發する神
ハされんハ聞え目とるいかあるも心をやかするその神
来りくかつ神の感あるらが故にいはく妙にみる
所あるも家ゐる所をはまたれぬ神ハまた皆し神
らうたる都をなへまへ給しみえる不あわりきんが
腹と患ひするもの空中乃形をとゞるは如し これをさ玄孫見ひとさ

夫子乃人の信する所のものハ目なか其聞しほとに信
するに足りける事あるをとのみおもひし人のおほきや
なるらんかはるゝくてとるへきものハ皆なきにある物なか
るの神なんあとさらん陂に耻をとりぬまで鬼人乃歟
なりさいひしかん 邵康節の説なるを 身に嫉るし事風乃ことく聞に
ふるもと家れぬくるわざを形なりくんものをきつるでに
手に人ちう陂へ死ろの死せるゝ人をよりさく物いふる
如くなるへからの鬼を身に異なりて明に異なるかにはあらと 幽し信し
風雨晦冥のときれときとらに明とく陽自ありて青天白日のときとらハ 却に鬼のある事多く人猶をとる
ろとも人よりもよく後に八明にも陽に霊ある事なり取

鬼すでに人の身を假りて物のいふ身となるもまた人唯予
しめはことのことは陽るへしや或は詩を賦し字を書
し或は人のおもひなん思ひもかけぬ事いはまほしうするなと
すものもありけらん むかし多く仙人とて其仙を修する術ありて帝も是を信じて天下其弟子共降して詩を作りこれを世に仙乃詩とて世に
傳ふるところありて其術はもて人にゆかりあり かのもろもろの人おのおの奴婢の卑
賤なる児童の幼昧なるものにしに越らされ又衰病の人
又しかる後起し是へ其類これなるの人をも鬼
有り鬼臨されはなすや鬼魅のその舎に入りて其身をのりうつり
人は私心の舎を又つくりを しかるへし乃鬼なる人の身を假るものなりと
或は倚りて物事假りて妖をなす事あり齊乃公子

彭生の豕となりける類これなり 左傳に いで かのいきる人にもあり
事はちのよしまた人の想ふよりて感し得るなりける
遊鬼なりてかの人にかかりしより後にはあやしむもしや人を
くにをわらうのそのよの妻おやまちて舟よりおちて
水に沈みぬ夫なくなく金山寺にゆきて僧を請して
なき跡のいとなみしけるにかの女かのもとに下部女
みなかの来りて自ら物云ひ其の處になりとなりのありて
かの死せし時のことをいふにまよひて其を鬼とかくその世
に迷ひける様なれはいたましとて其人に衣袖を去
ほのかにかくて三日乃後鍋する窮かの妻を具して来

見るまゝに婦が死せしにあらはれてうかゞひ出しけるに流れ出てうづまく所くらく見えて人をあらはれ出来さしよせて脇をさぐりしにその下部女乃このむすめをたのましくしろ乃切るゝによりて遂に相應しほうる趣なりとぞ宋のときの事を程朱頻傳にいへりまた或人乃遠方國へ行きしにむかしの妻のことを語りんとて其人妻乃籍とられて壁乃中にかくせし事のあらはしとらるゝますれて亡く云ふておもらん他のくるゝて病をなるけれて死すんなは隙く信に異しなる男をのせ事続告ける故星まゝに満ちる妻夫みゆく迹をいひはてたる

只獨立せしに其ちらの中にして人乃存するをないしと聞くに其きわり夫乃名乗て自らすでに死しけがぬ日比見てさはりて箱をまた人我かくせしに是死せし事語りしる心ひ語へさらんとひるこ乃壁の中をと見ゆるに一しられとさゝすとかよひまに及しらう家ひるをはしる死事と思ひしを教乃うちへ来られ壁の中をすべる日録ハ有るる妻は天に作りく在きけひとばしくあらぬ死の事なきいひとなへるけるにいて後にたりて夫ハ病気てかくり事かりれて妻を死しうる人の冤の隙かあらしくありかと大きる

義ある事をひとへに覚ゆるのこゝろもちハあまりて遊魂鬼と
人をなやますなどいふ事もありてまどひをふかくなしたまふ
はかなき事に伝ふる 程子弟子謝上蔡が書にいへり宋の時の事なりしとぞかの人死 さる人はそのかの人死
して或ハ人によりて或ハ物によりて事を得てその人と生れ
かはりしといふ事ハ疑ふべからず仏氏輪廻の説 前身ハ人にして後身又人となる 或ハ
かはりしハ前身完形にて人となり後身まで異形に生まれかはりしといふ事 あるハあやしうれ人も天地の間に
かゝる人は魚の水にすむがごとしかの腹にみてる気ハ
母のみ身を浮かべる水なるがごとしそのかの外を包む
天地の気ありて其寒く暖かなるをつたへてその理をもて伝
ふ 孟子乃説 されバ我父母乃字ハ是なりけり天地の字ハもちて

かの気をうけて天地父母のうけし処なりとかやと侍りし人
死しては鬼と為り鬼ハ帰る也と人となりし母ハかしこに死
しかば其事を人のかへるなりき素るなり
て天地父母の字をうけてうまれかはりてかの天地
をうけ初めて附きまとふ萬物ハなかの物ある人となり天
地父母の気をうけて生きたる事を得て自ら鬼となる
まことに人となるもあるハ世の人ありしは皆盤古氏の代乃
人は死してかへる生ありなき今の代にいはれるや 盤古ハ今
天地開闢の書 天地生じ此理いりて其ハ有る人物となりると
いふも其理なりける事侍るかくみえしさる人手結

環を記し。晋書に羊祜三歳のときめのとにいひてあそびし金環をとらへよといひしにめのとさる物もたせ給はぬものをといへば羊祜隣なる李氏が家にゆきて東の垣のもとの桑の木の中よりとり出しければそこのあるじの李氏大きにおどろきこれわが子のうしなひしものなりといひき時の人あやしみて李氏が子は羊祜が前身なりと 鮑靚が井を識し。これは鮑靚五歳のとき父母にかたりて我はもと曲陽のいふところの李家の児なりしが九歳のとき井に落て死しぬといひける事をたづねみるにそのごとくこれ符合せしとなり 厳武が諸葛亮の後身にて。唐の厳武が母武をうみし時の夢に蜀の諸葛孔明来りて子となるべしといひけるにより其名を武とつけぬ孔明を武侯と謚せしゆゑなり厳武はまさに蜀の国を守る大将となれりとぞ 鄧禹は范祖禹乃前身なりし。宋乃范祖禹の母夢に漢の将鄧禹衣冠して寝室に入とみて児をうめりなづけて祖禹とす宋名臣伝に出 ともにしるし皆正史家伝に載せし所なるに劉三復が前身を馬にてしりし。唐の時実有り 天子の御馬をあづかれる官人劉三復よりしる事ありてなりしことありて馬の事をよく知りしとなり 李林甫は後身は鶏となりしなど。陸元城といふ人鶏をうむとしけるに鶏の昔は李林甫といひし者なりと云て拝しとぞ 世に傳ふる説はすべて正気乃凝て信じ佩ひしにや是

等のこと又その人の生しなかりしを考あていへども佛氏のよしれ佛氏傳るところ周の宰僕は嶽群乃後身生まし 殷の傳説は箕尾に騎りて星となりしと。箕尾八星も星の名を傳説といへるもありしといへり いひ傳へしたぐひまたありしかのさきはじまりにあらんかされはまた鬼の人にうまれておのれ宋のときに都下乃一小児ありて三歳にて曲指皆節にあたらざれ李。諸子指ののよく利きしなどいふものをなせ 明乃ときに太原乃王徳華といふ身ありてしとまさしく蕃経を誦せる也類あり。蕃経とは西域乃経みなそれは其ひかしたし なりといへば曲をとりよくせる人あるは西蕃乃僧の死せしがその鬼の魂いかならで散ぜずしてその児

の身に附託せしものとうかゞひ侍るなりて物の性霊なるものゝよく物に感す（随よくものに化すといふ）蠶ハ性の異なるものなれバ是を飼ふに物にふれてハその物形をなす物なり漢のとよやれいんなる女の孫屋にて枕によりて望乃くつきよりか隣の家に蠶を飼ふをと何となく眠にみゐたるにあけ乃日その蠶繭（かいこまゆ）をなしけるがかの女乃形にそ似たりける同しく眉のかたちなとけさやかにて只へをゆかしきにこれを金もちにまくとふに物おもふ女乃形なるありし蔡中郎なれバ是を見て（蔡邕なり琴を浮する名誉なり）價あらて買得てしそれをもて琴乃絃となして浮けるに

その音いかにあはれなりしとぞ蔡邕が女（昔蔡琰之御のあることきゝてしく蔡邕乃名誉なりしとし）ていひ伝へのあるをきゝて此れ寡女の糸なりけるとなんいひしとぞ賈氏説林に載るこれなり女のこの蚕を飼ふ時にハなつかすなハち蚕の性の異なるを故にかくまでかの女に感しうつりしてや人ハ万物の霊なるものをさしおきてハ人乃聖人の教へに女子ハ孕める時ハ目に邪色を見ず耳に淫声を聴す物かたり飲食より起居の事にいたるまでおのれ慎みありこれ胎内の子の事をうくるにたしぬかなれハ一つとして乃正しきのみ盛せしめんが為にて教へたる事なる夫は

しみ乃中ニ鬼乃肉を喰らひ生薑とりて婦幸採れ
いむ年あり生薑とらへはうまれ子指おほく　その餘みるみの
ちぢみむなといふてその組にかなひてし鬼乃肉とらへたまふ子唇かくる類し
とらひ併へまゐらせうまれる子流或ハ唇鈌けあるひハ
指多きハそのうさ又はじめの後身ふへたがひたるを
其氣ニ感しぬる由來なり　猶又猪の毛をきひのびきの壱乃枝に加さらしめて米子の猪をまうけしこと
さひさんなどいふ理あるべき　人のはじめに拿をとり取残をきんとすなに
時ハ其生乃氣もんはげしなたる由人ニ死して散じ
あんとする氣あれて感して々たら才まま引かん
まさることを潮乃さりかに満来るとき海に流さざる人

河水乃せきとめてわくぎるし流れて海まの隔る如
し人の死しぬる時ちとめる女乃侍ちらく立入れて
そのちまちに尸みらごまはらしくしせうましてれ
其あきらかまさらうしなり又よりしたる者あるきは
敏ふるが　女乃ふしきを敏とらふ　や年たけて後ニその才劣まさる
なかりせふてられらうくわが性氣をうけし始まりの才兒乃
よりしま　すぐるる人乃こんとうまり　文字しうまを用して長したらままよ
感して除られる氣ハ用して散して老るゆゑにまま尽く
松の子木まの本性あって花とりふて紅なる蓮
乃実残せる花龍疑乃中より忍ばれぬはじめん花残

ひさしく枯ちるの葉青し年経て藍乃字水ありて
花乃色李の如く紅なるもまた物ならして人を生れ人ならし
て物と生ることは人物の氣のまじはりに相感しぬるなと
ことわりは然の理なりさればまた女子乃丈夫に
化し丈夫乃女子に化し男子または子をうめるの類
なれ史傳にもあまたみえたり又人生ながら虎と成り
牛哀虎となりし猿となり太原の王含か母又亀となり江夏の黄氏か母蛇と成り
李勢か夫人あるひは人死して後ふたゝびいき返るもいふ
なる化しするに於てはあやしけれど各自ら分をみれ
陰陽卒亂の年乃ほどには多くは国家滅亡の兆の

取るところなり恩にいたりて大子の語に
錯ふるかし處なりといへり男れ女となり女の男
となれる事は漢の京房か易傳に女子化して丈夫と
なるこれを陰昌といひ賤人王となる丈夫化して女子と
なるこれを陰乃陽に勝るなり厥咎亡ふまた男化
して女となるを宮刑乃濫なるべし女化して男となれば
婦政乃行はるなりといへり又春秋潜潭巴には男の女
と化するを賢人位をさる女の男と化するは賤人王となる
などいはれいにしへよりこの事あらしとがたへ紂王の
時なりき周の文王乃男子二年にして武王位に即せさせひし

元年なるに女子変じて化して丈夫となれるといへり竹書紀年にもいへり戦国の世魏の襄王十三年にもこの事有しとし史記世家に載せられたれば漢晋唐宋の世にも此等はありき（漢のときに一人晋に二人宋に一人 宋に二人なれども始へ伝ふ）又かの蜀王武都の丈夫の女となれるを愛して妻として国をほろぼし給ひしよし華陽国志に見えたり此の外晋のとき宋の南渡の後明の隆慶年中にも此の事侍る（漢に二人晋に一人 宋に一人明に一人）男子化して子を産める事宋明の世にも此の事侍る（宋に一人 明に一人）姑獲のごとし子となる事はかしこまりし（これ明の時のことなり）この慶乃同周文襄にかくと告ぐる文襄怪しき者として向ひ汝が罪懐しむ

へ記卑なりといへども今の人男気をやつして女色よりなるを甚しく勢ひかはりてなく有べき物とぞいひける是ら人皆衰世のしるし亡国の兆なれば京房が占のごとき或はあやまれる虚うする天人の感するも遠からず陰陽の変はあると見るべからず次まで至淫の気の化して寧婦人と成至暴の者は化して猛虎となる此の変するところ後変せんとするものを得すといへり（譚氏の説）これ暴悪乃心あるものは人にして猶いまだ化せざるの痛く貪欲なるものは人にしていまだ化さざるの狼を化せざる処のものは終ひ形のかへて変じたるは気なり

変すへく常ありて変せさる形もなく変すへし彼大なる変化は
時ハ火なるすらも熱し怖るべきハ水なるべしして寒しされ
ハ物の一ッにして常を執らするもの八大暑くあるへからす寒
く大寒になるへからすして熱気ハ身に益し病を患る人なれ
ば腹の中に生するものゝ彼の形をなすものとなる病に
よるべく等しかるべし此によれバ血肉の常を思ふに化して病
蛇乃ごとく鼈の如きもの虎狼と化し鼈蛇と化せし人
を損する事もはなはだ甚霊なるものハ体ありて
すべく皆化せざるものゝ雀蛤となり田鼠鴽(ヌカトリ)となる
ことも物化乃変体にしてかくのごとくなる人にまでおよぶを

物の変化乃理をしらずしてしかいふべし唯是
は物の理にあらずや天地の物は変乃ごとき八常にあるへからさる
ところなき物の変する八これその時の変乃ごとくなるを
いふものにあらずかくしてこれ雀蛤となり田鼠鴽と
なるの類を礼経乃載る所といへども（礼記月令）人あるひは疑
ひなるものハ信を蟬の蜣螂となり孑孑(ゲツケツ)(ボウフリ)の蚊となるの
ごとき八人皆よく知れるところなれば疑ふ人一人もなき
なる事なし其人乃信する処ハ目の見るところにて
見るにハあらざるをよく知るものは彼人化しるべく
ものとなるの類を本より其の理にしるべく人の疑ふ

とく後むべきなりやうらぬに夫子の怪をかたらせたまはぬ
さる故にやあれ

鬼神論上終